

環境保全のボランティア体験講座 2025 第6回講座レポート

第6回目の講座は、10月19日(日)に大阪市旭区にある淀川城北ワンドで開催しました。この日の受講生は途中で合流した人も数名いましたが最終的には14名。朝から心配されていた雨に降られることもなく、曇りでの比較的過ごしやすい天候となりました。

今回は(公社)大阪自然環境保全協会の学生インターンシップ生に、受講生として同じ立場で参加してもらいながら、集合場所での受付や講座後半にある資料配布では少しご協力いただきました。

彼は、本日お世話になる淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク(通称イタセンネット)の活動には3回目の参加で、少し経験者にあたります。

さて、集合場所では今日の流れをしおりで確認、その後城北公園の中を通り淀川の堤防を越えて河川敷に向かいました。



河川敷に着き、本日午前中に水の中に入って活動するメンバーが、胴長(ウェーダー)と呼ばれる水の中に入るための装備やライフジャケットを着用しました。

9時から、イタセンネットのミーティングに参加しました(写真左下)。

イタセンネットは、天然記念物のコイ科の魚、イタセンパラの野生復帰と淀川の自然再生を目指し、外来魚駆除や河川清掃などを行っている団体で、2025年4月現在、国交省や環境省をはじめ、研究機関や民間企業など合計46もの連携団体で構成されています。

右下の写真は全体ミーティング終了後に受講生が集まり、イタセンネットの綾会長のお話を聞いている様子です。



そして一行は城北ワンドのすぐ上を南北に跨ぐ、菅原城北大橋の上へと歩き出しました(写真右)。

橋の上では、綾会長のお話をお聞きしながら下流側を確認しました(写真下)。

ここでは、大阪府の生物多様性ホットスポット A ランクという、府下最上位の環境豊かな場所に位置付けられている淀川ワンド群の景色を一望できます。淀川右岸・左岸全体を見渡すことができ、大阪市内に大自然が広がっている事を実感できます。



9時45分を過ぎ、この日の大きなイベント、「淀川わんどクリーン大作戦」の受付が始まりました。国土交通省淀川河川事務所が毎年1回秋に開催しているものです。イベント開会10分前の様子をご覧の雰囲気、この時点で例年以上の人が集まっているようでした。



淀川わんどクリーン大作戦がはじまりました。

淀川河川事務所の担当官のあいさつなどが終わり、軍手を装着しゴミ袋や火ばさみを持った参加者は、各ワンドに広がっていきました。

講座の参加者の皆さんは、左下の写真のようにD型フレーム網を片手に水上のごみや外来植物を回収すべく移動しました。

ワンドには上流から順番に実は番号が振られており、33号ワンドの手前の角まで進みます。



今回水の中に入るための胴長(ウェーダー)は4着が自前でしたが、貸し出しの8着は初めて使用する人が殆どなので、慎重に水の中に入り作業してもらいました(写真右下)。

33号ワンドには写真のようにアオウキクサが一面を覆っており、水質悪化が懸念されるためにその除去と、岸寄りの部分には特定外来生物であるオオバナミズキンバイやナガエツルノゲイトウが岸際で繁茂していたので、受講生に引き抜いてもらいました。

この2種類の特定外来生物は主に南米原産の水生植物で、葉や茎の切れ端からでも再生するほどの驚異的な繁殖力を持っており、すぐに水面を覆い尽くして他の生物の生態系に大きな影響を与えます。



と・・・早速ハプニング発生！

受講生のライフジャケットのセンサーに水が付き、作動して膨らんでしまったようです。複数のアクティビティの同時進行により、借用元の担当者が近くにいなかったため、そのまま暫く着用で作業をしてもらいました。ごめんなさい。



下の写真は外来植物などを集積している様子です。

非常に短い時間でしたが、皆さんには時間いっぱいまで採り続けていただきました。野積みにしたものもありますが、45Lのごみ袋3袋分ほど回収できました。



ごみ回収の終了時刻となり、拠点に集まってきたごみが左下の写真になります。

こちらでは把握していませんが、何ヶ所かに集積地が設定されており、この量は一部になります。また、右下の写真は同時進行していたイタセンネットの地引網で捕獲された魚たちの仕分けの様子です。



クリーン大作戦での前半の清掃活動は終了ということで、クリーン大作戦の後半はこの周辺地区で環境保全活動をしていることからイタセンネットの団体紹介があり、イタセンネットの綾会長がこれまでの活動の解説を、パネルを使用して行いました。



そして今回の目玉、「文化庁指定の国の天然記念物」で「環境省指定の絶滅危惧 IA 類(最希少種)」で「淀川のシンボルフィッシュ」と呼ばれているイタセンパラの展示をしていたので、担当の生物多様性センター古澤氏よりこの魚類について解説がありました。



こちらがイタセンパラです。

2005 年を最後に淀川から姿を消しましたが、生息域外保存により系統保存されていた個体が 2013 年 10 月に放流され、一時は復活していました。

しかしまた 2022 年を最後に姿が見られなくなってしまう、関係各機関により再導入への方法などが検討されています。



そして、先程までのイタセンネットの活動で捕れた魚の説明を、イタセンネットの連携団体である環境事業協会の職員でイタセンネットの理事でもある岡本(緑色の服)が行いました。机上に並べられた観察ケースには、それぞれ1種類ずつ魚類を中心とした生きものが入っていますが、ご紹介をしながら順番に皆さんに回していき、手元で見られるようにしました。活動時、魚類などは毎回十数種類捕れるのですが、実はほぼ毎回岡本が説明しています。



左下の写真は、手元で魚を観察している受講生の様子です。右下の写真は、解説が終わり、地引網のデモンストレーションの見学に向かう受講生を含む見学者の方々の移動の様子です。



以下の写真は地引網の様子と、それを見学する参加者の方々の様子です。



そして、地引網の横で発見したスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の、卵塊の解説の様子です。台湾経由で日本に来た南米原産のこの生物は、環境省の生態系被害防止外来種リストにおいて重点対策外来種に指定されています。水中の生きもののはずなのに、水面から20cm以上空気中に突き出た位置に卵を産みます。逆に、水に浸かると卵はなんと死んでしまうという不思議な話に、受講生は耳を傾けていました。



ここでイタセンネットの定例保全活動とコラボ開催した、わんどクリーン大作戦は全て終了。受講生はお昼休憩に入りました。

午後からはこの講座だけの特別メニューで、まずは資料を使った淀川の歴史を中心としたミニ講座が綾会長よりあり、明治からの壮大な付け替え工事などのお話に、受講生は静かに聞き入っていました。



淀川について理解できたところで、次のアクティビティは投網の練習です。午後の後半の活動で、本流で投網をすることから、その時のための実習となります。滅多にできない経験ですが、イタセンネットの連携団体、大阪産業大学の鶴田先生（写真左下）に持ち方から丁寧に教えていただきました。



受講生が網を持ち、イタセンネット内で投網を経験したことがある学生や綾会長が直接持ち方の指導をしています。



岡本も投網の持ち方の指導をしました(写真左下)。

学生インターンシップ生も受講生と同じように投網の持ち方から学んでいました。

皆さんなかなか難しいようで、持ち方の習得時間に個人差があったように感じますが、それなりの形となっていました。



後半には以下の写真のように皆さんうまく広がるようになっていました。

十数分の練習時間だったので、上出来だと思います。



練習時間の最後は、収納時の結び方を学んでいます。
絡むことなくコンパクトに袋に入れられる方法です。



そしていよいよ実践のため、淀川の本流に移動します。
wandとwandの間に伸びる水制工の上を歩いていきます。
下の写真のように、水制工には水辺によく生えるヤナギなどの大きな樹木が立ち並んでいます。
この木々は、大雨などでの出水時に木に引っかかった流木などが大災害を引き起こさないように、5年に1回くらいのペースで一斉に伐採されています。



さて、ここからは2人で組になってD型フレーム網と投網をそれぞれが使いますが、組での使用方法や胴長の入れ替えについて説明を聞いたのち、受講生は川に入っていました。



昨日の雨でプラごみの漂着物がどこかに流れていった分、左下の写真のようにホテイアオイ(大きな葉の植物)といった浮草が流れ着いていました。
この付近は淀川をよく知る人しか知らないと思いますが、投網には絶好の遠浅になっています。
写真のように膝上くらいの高さの水位で砂地の底が、かなり広い範囲に続いています。
早速、網を投げられるくらい、お互いが離れあって網を構えて投げはじめました。





イタセンネットの学生サポーターがバケツを持って行っていたので、その中に採れた魚を入れて集めていました。
左の写真では3人が集まっているのがわかりますが、何か採れたようでした。

胴長を着ていない陸上組はD型フレーム網で岸際の生きものを探していました。
この時は水草などの漂着物ばかりで、なかなか動物が見つかりませんでした。
胴長の数の都合で今は陸上ででの活動ですが、この受講生たちも半分に時間を区切った途中から、交代して胴長に履き替えられます☆



さて、本流での活動時間も後半となり、陸上組は交代して胴長に履き替えてチャレンジです！
引き続き胴長を履いての活動をする人も、最大1時間、D型フレーム網や投網を使用して魚採りを楽しみました。



本流の中から撮影した様子です。
かなりの広範囲、浅瀬なのが見て取れます。



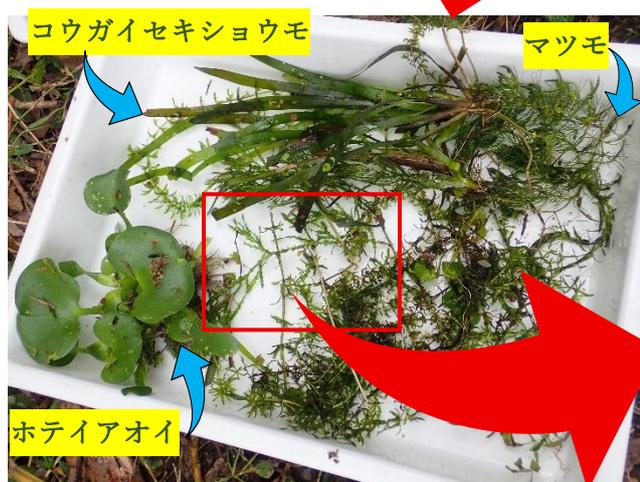
下の写真は藻の塊の中にある生きものを狙って、D型フレーム網で所謂ガサガサをしている様子です。

何か採れたかな～！？

この付近に魚が多かったようです。



さて、1 時間ほど経ち、実践は終了！皆さんに岸に上がってもらいました。
その皆さんが投網をしている時に、岸近くに漂着している水草を集めてみましたので、その解説からはじめました。



水草類

- ・イバラモ: 大阪府レッドリスト 2014 では絶滅とされていますが、昨年の体験講座でも同様にこの場所で見つかっています。琵琶湖には生息しているので、流されてきて淀川で復活したのかも？
- ・マツモ: 根を持たない国内在来種です。水槽では夏場に 1 日で3cm伸びたことがありました。
- ・クロモ: 国内在来種です。似た品種でアナカリス/オオカナダモやコカナダモというアメリカ原産の水草がありますが、見ている限り、最近はそのらは減ってきています。
- ・コウガイセキショウモ: 淀川では国内在来種のセキショウモは絶滅とされており、コウガイモと海外品種のセキショウモの雑種が淀川では広がってしまっているようです。
- ・ホテイアオイ: 南米原産で、明治時代に観賞用として日本に輸入されてきました。葉柄が膨らんで浮袋のようになり、その形状から七福神の布袋尊のお腹を連想してその名がついたとされています。生態系被害防止外来種リストにより、「重点対策外来種」に指定されています。

そして皆さんが投網などで採集した淡水魚です！

なんと全体で 50 匹も採れたのでした。

実は例年は全体で 1～2 匹でしたが、今年の皆さんは群を抜いた成績でした。



魚類

- ・カマツカ: 水底が砂礫の場所を好むため、近年ではワンドでは数が少なくなっています。投網をした本流では底が砂礫となっているため、複数の個体が見られたようです。
- ・ニゴイ: この種も底が砂礫の場所を好むため、かなり複数の個体が捕獲されました。
- ・オイカワ: 川の上流部から下流部まで、幅広い環境に生息している種類です。産卵期になるとオスはきれいな婚姻色となります。
- ・カネヒラ: イタセンパラに近い種類で、産卵期を迎えているためオスはきれいな婚姻色となっています。
- ・モツゴ: 比較的外来種が多い水域にも生息している在来種です。
- ・ボラ: 海と川を行き来している両側回遊魚と呼ばれる、大きさによって名前が変わる出世魚です。
- ・ブルーギル: 特定外来生物で、2005 年からの外来生物法により飼育などが禁止されています。
- ・オオクチバス: ブルーギルと同じく特定外来生物で、日本の生態系に大きな影響を及ぼします。

以下は、今回の講座で捕獲した生物の一覧です。

黄色の枠に示したように我々の観察だけでもこんなにもたくさんの外来種が見つかりました。実は皆さんが歩いていた水制工上に生えている陸上の草本類などにも、かなりの外来種の数が在来種に混じり混生しています。

今回の講座内で採捕した水産動植物及び数量

外来種
在来種

| 種類名 | 数 | 処理 | 備考 |
|------------|----------------|------|-----------------------------|
| ブルーギル | 10匹 | 駆除 | 国外外来種 |
| オオクチバス | 9匹 | 駆除 | 国外外来種 |
| オイカワ | 4匹 | リリース | |
| カマツカ | 4匹 | リリース | |
| ニゴイ | 16匹 | リリース | |
| カネヒラ | 4匹 | リリース | |
| モツゴ | 2匹 | リリース | |
| ボラ | 1匹 | リリース | |
| アメリカザリガニ | 1匹 | 駆除 | 国外外来種 |
| カワリヌマエビ属 | 数匹 | リリース | 在来・外来・雑種の区別がつきにくいので一律してリリース |
| スクミリンゴガイ | 卵塊1つ | 駆除 | 国外外来種 |
| チリメンカワニナ | 数個体 | リリース | |
| ヒメタニシ | 数個体 | リリース | |
| オオバナミズキンバイ | 容積 | 駆除 | 国外外来種 |
| ナガエツルノゲイトウ | 45L×2袋程度 | | |
| アオウキクサ | 容積 45L×1袋程度 | 駆除 | 水面を覆っていて、水質汚濁の原因となるため駆除 |
| セキショウモ | 数株 | リリース | コウガイセキショウモ（外来との雑種）の雰囲気あり |
| ホテイアオイ | 数株 | 駆除 | 国外外来種 |
| クロモ | 数株 | リリース | |
| イバラモ | 数本 | リリース | 大阪府レッドリスト 2014 では <u>絶滅</u> |
| マツモ | 数本 | リリース | |

活動が終わり、感想を共有している様子です(写真右)。

3名ほどに感想を述べてもらいました。
内容につきましては後程アンケート紹介の部分で一部をご紹介します。

最後にイタセネットの方々と、最後に記念撮影を行いました(写真下)。

お世話になったイタセネットの先生方をはじめ、学生の皆さんもありがとうございました。
学生の皆さんは受講生とも年齢がほぼ同じなので、同世代でたくさん楽しめたと思います。



左の写真は、イタセネットの方々とお別れしたあとに、次回のしおりを用いて説明を聞いている受講生の様子です。

野外活動も残すところあと1回です。

次回は富田林の奥の谷で放置竹林についての講座を開催します。

この後、受講生全体で城北公園に移動、活動に使った胴長を公園内の水道で受講生自身により洗浄を済ませ、集合した場所で解散となりました。

さて、アンケートでは、以下のような回答が寄せられました。

・ワンドの環境としての大切さや、保全の取り組みについて知って、ますます淡水魚への興味が深まりました。淀川本流と、城北ワンドとの環境の違いによる魚種の違いも面白く、また、水草の種類、数共に多くて驚きました。ワンド内にもまだ外来種が多く生息していて根絶は難しいと思われませんが、やっている効果を少し感じられました。

・河川の保全活動の1つとして、今回“ワンド”というものを初めて知り、とてもいい学びを得られました。地元の河川でも…。と考えるのが、とても良かったです。今後の学習に生かしていきたい。

・今回の講座は今までより、環境保全の活動で直線的な活動でとてもやりがいを感じました。学校で学んだことを活かせてよかったです。ワンドのような中規模なエリアだからこそ、人の管理で多様性を保全できるのだと考えました。

・実際に外来種の魚を捕まえたりしたことで、どのくらいの外来種がその土地にいるのか、どのくらいの面積に何種、数の生き物がいるのか分かり外来種の多さを実感しました。ゴミ拾いや外来種駆除を年齢限らず多くの人とできてよかったですし、こんなにも多くの方が保全活動をしているんだと知って嬉しかったです。

・このボランティアに参加させてもらってきた中で魚に関したものがめずらしく、体験内容も自力で投網を使って魚を捕まえたりすることで、魚により興味を持てた。在来種と外来種が見分けられなかった。魚を守っていくためにも知識を増やす必要があるなと感じた。

・明治時代の治水工事の名残が、今は姿を少し変えてはいるがまだ残っていることに驚き、このワンドも未来に残していくべきモノだと考え、浅瀬で生息している生物のためにも保全を続けていきたいと思いました。

・胴長を着用することも、投網を投げることも初めての経験で楽しかったです。また、淀川わんどのクリーン大作戦では多くの人や家族連れなどが集まっているのを見て、自分に子供ができたなら一緒にボランティアに参加したり、将来世代に水質の改善など環境問題について伝えていきたいと思いました。

・投網はテレビの中でしか見ただけだったので実際に体験出来て良かったと思いました。実際に魚は取れなかったのですが、貴重な体験となりました。

以上のように、まさにフィールドミュージアム淀川での学習により、実際に水の中に入って生きもの調査を行えたことで、21種類以上の生物を自然のありのままの姿で目の前で確認できました。そのことにより、生物多様性の問題を身近なこととして深く考えることができ、更に、河川のごみ問題についても考える機会となり、いつも以上に受講生にとって非常に充実した楽しい講座となりました。

ご協力いただきました多くの皆さま、ありがとうございました。